

# 台北日本人学校 低学年児童の国際理解教育

前台北日本人学校 教諭

群馬県甘楽郡甘楽町立秋畑小学校 教諭 谷川 英樹

キーワード：日本人学校，台北，国際理解教育，低学年，生活科

## 1. はじめに

台北日本人学校は、台湾北部の台北市にある。台北市は台湾の中心都市で、人口約260万の近代都市である。日本人学校はその中心部から約12km北に位置する天母という街にある。天母はもともと畑ばかりののどかな田園地帯であったが、日本人学校、アメリカンスクールが建設されると、そこに子どもを通わせる外国人が多く住むようになり、高級なブティックやカフェなどが建ち並ぶおしゃれな街に発展した。日本語、英語、中国語の飛び交う、国際色豊かな街である。日本人学校は、その天母の中心、中山北路と天母東路西路が交差した場所にある。平成22年度は、小学部17学級、中学部6学級、児童・生徒数は約730名である、特徴としては、国際家庭（両親のどちらかが外国籍）の割合が40%近くに上ることがあげられる。子どもは二重国籍であることが多く、家庭環境もさまざまである。職員は、派遣教員、現地採用職員、用務員、警備等含めて63名で、日本人学校の中では大規模校である。

台湾は、日本から飛行機で3時間半という近さにありながら、多くの日本人がそうであるように、私も派遣されるまで台湾についての知識はあまりなかった。しかし、台湾は「知れば知るほどおもしろい」と感じる興味深い国である。ちょっと見ただけでは日本人か台湾人か区別がつかないほど見た目はよく似ているのに、異なるところがたくさんある。例えば、屋台で売られている料理や食べ物は千差万別で、日本の食文化や日本人の感覚を完全に超えている。見た目で衝撃を受けるような食材もあれば、感動するほどおいしいもの、強烈な臭いで逃げ出したいくなるものなど、有象無象の料理があふれている。宗教感もかなり異なる。台北は東京のように大都會であるが、旧正月やお寺のお祭りの時には、大きな花火が何百発も普通に上がる。火事という心配はしない。私が住んでいたマンションの10階だが、家のバルコニーの前で大きな花火が何度か爆発した。葬式の際は爆竹が大音響をたてて爆発する。台湾では爆竹は日用品である。ロケット花火祭りなども日本では考えられない祭りである。自分たちの文化と異なるものに触れると、子どもでなくてもどうしてなのか知りたくなるし、自分自身や日本のことも考えるようになる。日本人学校の子どもたちも異文化との交流を通して成長していく姿が数多く見られた。私は、台北日本人学校で、小学部2年生の担任を3年間受け持った。その2年生の実践内容を報告したい。

## 2. 国際理解教育の実際

### (1) 生活科の学習「天母たんけん」を通して

日本の学校であれば生活科の学習で、子どもたちだけのグループで町探検を行っているが学校は多いが、在外教育施設となると、安全面の理由から実施は難しいところもある。しかし、ここ天母は治安がよく、交通面の安全ささえ確保できれば、実施は難しいことではない。3年前の町探検では、各班に中国語がわかる保護者が2名ずつついてもらい通訳や写真撮影などをお願いして実施した。一昨年は、各班に1名の保護者に引率してもらい実施した。が、昨年度は、保護者の引率なしで、教員が途中まで引率し、ほとんど子どもたちだけの力で町探検を行った。言葉がわからず苦労した班もあったが、どの班もなんとか当初の目的を達



生活科「天母たんけん」

成ることができた。子どもたちは例年以上に達成感や自信を得たが、そればかりでなく、町の人の優しさにも触れることができたようである。

### ① 活動の流れ

<ul style="list-style-type: none"> <li>・町のふしぎ・ひみつを見つけに行こう。</li> <li>・みんなで天母を探検しよう。(第1次探検)</li> <li>・くわしく探検する計画を立てよう。各クラス7グループ。計21グループ。</li> <li>・グループでくわしく天母を探検しよう。(第2次探検)</li> <li>・見つけたことを教え合おう。(発表 まとめ)</li> </ul>
---

### ② 子どもたちの感想

- ほくは天母たんけんて、しょうぼうしょに行きました。きゅうきゅうたいいんには、大学に入学してけいさつのしけんをうけるとなれることや、きゅうきゅう車は一日5～8回出どうすることを教えてもらいました。しょうぼうしのふくをきさせてもらってうれしかったです。ほくはしょうらいしょうぼうしになりたいです。
- わたしは、天母國小へ行ってびっくりしました。天母國小の先生は132人いて、子どもの数は2716人いると聞いたからです。きゅうしょくは、一日四十五円で食べられるそうです。日本人学校とちがうところがたくさんあっておもしろかったです。

## (2) 現地校「土東國民小学校」との交流会を通して

現地校に通う同年代の児童との交流を通して、異文化・現地理解を深めることをねらいに、低学年の児童は、現地の土東國小の2年生(7クラス、約200人)と交流会を行っている。この活動は、1年おきにそれぞれの学校を招待するという形で行なわれる。昨年度は日本人学校の児童が土東國小の児童を、一昨年度は土東國小の児童が日本人学校の児童を招待する形で実施した。年度末の文集では、2年生のおよそ3分の1の児童が1年間で最も印象に残った行事として文集に書いている。子どもたちにとって非常に印象深く学び多い行事である。

### ① 日本人学校での活動の流れ(昨年度)

出迎え(名札、プラカードの用意)	
開 会 式	・はじめのことば ・本校校長の話 ・学校記念品交換 ・本校児童代表のことば ・土東小児童代表のことば ・演技披露(本校・土東小) ・おわりのことば
班 作 り	交流するグループに分かれる。 ・自己紹介 ・名刺交換
交 流 活 動	・体育館で手作りゲームでの遊び(魚釣りゲーム 福笑い 折り紙など) ・学校探検 -1・2階 校庭 遊具周辺 日本の遊び(竹トンボ コマ 竹馬 ダルマ落とし ヨーヨーなど) 巡り
閉 会 式	・はじめのことば ・本校児童代表のことば ・土東小児童代表のことば ・プレゼント交換 ・全体合唱(世界小小) ・土東國小校長の話 ・おわりのことば
見送り 片付け 清掃	

### ② 現地校での活動の流れ(一昨年度)

流れは日本人学校と同じであるが、交流活動は、日本人学校の児童と土東國小の児童でペアを作り、ペアで7つのゲームに挑戦し、クリアできるとはんこがもらえ、7つすべてをクリアできると賞品がもらえるという活動であった。ペアを組んで活動するため、交流を深めることができるはずであったが、この年は、新型インフルエンザの流行を防ぐため、互いに12名の代表者のみの交流会になった。代表者のみの交流であったが、代表者が持ち帰ったプレゼントやビデオレターから「会えないけど友だちだよ」というお互いの気持ちを伝え合うことができた。

### ③ 児童の感想

- ぼくが心にのこったことは、手作りのゲームで土東國小の友だちとあそんだことです。中国語で話せなかったけど、楽しかったです。一番おもしろかったあそびは、ふくわらいです。ハチマキで目をふさいでやったので、おもしろい顔ができておもしろかったです。土東國小の人とずっと友だちでいたいです。
- たくさんれんしゅうしたけど、じこしょうかいはきんちょうした。でも、紙ひこうきとばしていっしょにあそんでいるうちに楽しくなり、学校あんないほうまくできた。張くんも林さんも楽しいと言ってくれたのでばくもとてもうれしかった。プレゼント交換でまんげきょうがもらえてうれしかった。

### (3) 日本語を話すお年寄りのグループ「玉蘭荘」との交流を通して

市内に、玉蘭荘（ぎょくらんそう）という、台湾在住で日本語を話すお年寄りを対象にしたデイケアセンターがある。台湾は1945年までの日本統治時代（51年間）に日本語教育が行われていたため、日本語を台湾語同様に母語としている老人がいる。かなり数は減ってしまったらしいが台湾人と結婚してそのまま台湾に残ることになった日本人の女性もいる。そんなお年寄りの悩みは、戦後中華民国に接収された台湾で徹底した中国語（北京語）教育が行われたため、子どもや孫と日本語で会話が出来ないことである。孫の世代となると日本語はもちろん台湾語も話せない人も多く、中国語の苦手なお年寄りはさらに孤独感を深めてしまっているという。また、日本人としての教育を受けてきた台湾のお年寄りとして、「日本語でしか表現できないものがある」のだという。そんな日本語を慕う台湾在住のお年寄りのために設立されたのが玉蘭荘である。玉蘭荘のお年寄りたちとの交流を通して、子どもたちは日本語を話す台湾のお年寄りと交流する。低学年の子どもたちには、歴史の難しい話は分からないが日本語も中国語も自由に話せて、いろいろなことを知っていて、いろいろなことができるお年寄りたちに純粋に感動している。

#### ① 活動の流れ

(チャーターバスで迎えに行く) ⇒ 開会行事		
交流活動 ・全体活動 ・歌やダンスの披露 ・一緒に合唱 ・グループ活動 ・自己紹介 ・お話を聞く ・おじいさんおばあさんの得意な遊びで遊ぼう		
閉会行事	【中学二年生との交流】	(チャーターバスで送る)

#### ② 児童の感想

- おじいちゃんおばあちゃんのむかしのあそびはとてもじょうずでした。ぼくはとりはだが出てきました。お手玉のグループであることをすっかりわすれてしまい、むちゅうでおり紙をやっていました。また、こうりゅう会がしたいです。
- わたしたちは、おじいさんおばあさんとこうりゅう会をしました。みんなまだ元気でいろいろ楽しく歌ったり、お手玉をしたりしていました。わたしは、あやとりグループに入り、おばあさんたちにいろいろ教えてもらいました。わたしは、あやとりがすきになりました。

### (4) スポーツ活動を通して—楽楽棒球の活動—

台北日本人学校には、野球を始めサッカー、陸上、バレーボール、バトミントン、卓球、剣道などのスポーツをはじめ、吹奏楽、軽音楽、和太鼓などの文化系クラブなど、様々な課外活動があり、他校などと交流している。その中に低学年の児童が主体となる「楽楽棒球（らくらくばんちょう）」という運動部がある。「楽楽棒球」とは、野球の少年少女版というようなスポーツである。ボールはソフトボール大ほどの柔らかいものを使う。バッターはボールを「ティ—」という棒状のスタンドの上に乗せて打つ。ピッチャーが投げる動くボールを打つのではなく、止まっているボールを打つので、小さい子どもでも簡単にできる。簡単にできるが、奥も深く、台湾では大人の全国大会

もあるほど人気のあるスポーツである。一般の野球と違うところとして、次のルールがある。

- ・タッチプレーがない。ベースへの滑り込みがなく野球の一塁と同じように駆け抜ける。
- ・フライを捕った後のダブルプレーがない。
- ・帰塁のラインを越えると帰塁できない。次の塁に行かないといけない。
- ・本塁から半径5メートルのところに扇型の円がある。それ以上ボールを打たないとファール扱いになる。
- ・2ストライク後のファールはアウトになる。

日本人学校では、低学年の児童が所属することのできる数少ない課外活動の一つである。監督は現地採用の先生の配偶者がボランティアでやっており、週に2回練習に来てくれる。明るくいい方なので、みんな喜んでやっている。そして、休みの日には、市内の現地校の「楽楽棒球」のチームと練習試合をしたり、全国大会につながるような大きな大会に出場したりしている。日本人学校ということで、どこへ行っても熱烈に歓迎してくれる。試合後、子どもたちは他校の児童と打ち解けて仲良く遊ぶというところまではいかないが、お互いいいプレーが出れば自然に拍手をしたり、マナーとしてよいところがあれば真似をしたりする。自分たちと同じように真剣にスポーツに取り組む台湾人の小学生を見て、気持ちを通じ合わせていたように思う。

### 3. 終わりに

子どもたちは、生活科の学習や現地校との交流会、スポーツなどを通じて国際理解や国際交流を行っている。これらの取り組みを通して、異文化に対する不安や現地校児童との人間関係を築くことに不安を抱いていた多くの児童が、「楽しかった」「またやりたい」という感想を持つ。言葉が通じなくてもこちらに伝えたいという気持ちがあり、相手にわかりたいと言う気持ちがある時はかならず気持ちは通じることに気がつき、でも、言葉が通じればもっといろいろ分かりあえて楽しいということにも気づく。その気づきがその後の中国語や英語の学習の意欲につながっていているように思う。

子どもたちの国際理解教育について紹介してきたが、昨年度ははじめて教員も現地校（土東國小）の先生方と交流会を持った。仕事としての打ち合わせではなく、放課後、仕事を離れて話をする機会を得た。お酒を飲みながらというわけにはいかなかったが、お茶を飲みながらいろいろな話ができ、相手の事情や考えを理解することができた。教員同士が今まで以上に密接な関係・信頼関係を築くことができ、今後もさらにより交流会に発展していくように思う。